

ひとたび死なば みな「ほとけ」

——日本人の死生観を考える——

早 島 理

みなさん方、こんにちは。ご紹介いただきました早島です。

三月まで滋賀医科大学に勤めておりました。四月から京都の龍谷大学でお世話になって
います。先ほど学長先生からご紹介いただきましたが、元々の専門はインド仏教学です。
特に滋賀医科大学に勤めましてから、生命倫理の問題、あわせて命の問題を考えさせられ
ています。今日はそういう視点を交えて、仏教の思想からみた生命倫理、あるいは命の問
題を「ひとたび死なば みな「ほとけ」というテーマで、若い方にはもうひとつピンと
来ないかもしれませんが、話をさせてもらいます。

みなさん方のところはどうか知りませんが、私の田舎では、例えば病院に入っておられ

たり施設に入っておられたお年寄りの方がそこで亡くなって、久し振りに自分の家に戻って来る時に、こういう言い方をするんですね、「仏さんが帰ってきた」と。「ご遺体が帰ってきた」という言い方はあまりしません。みなさん方のところはどうか。私の田舎だけかもしれません。亡くなった方は死んだらみんな死人なんだけど、「ひとたび死なば ただ死人」と言うのではなくて、みんな仏さんだよと言って、亡くなった人をただの死者ではなく仏さんとして敬うというのが、日本のある意味では伝統的な考え方だろうと思うのです。その話をいたします。もう一つ、亡くなった方を、ただ死者、あるいは死人というかたちじゃなくて、「仏さんだよ」という言葉に込められた、命に対する思いを一緒に考えてもらいたいと思っております。

まず確認しておきます。みなさん方はご存じだと思いますが、「仏」という言葉は本来の意味は、仏陀（ブツダ）、目覚めた人という意味です。真理を悟った人という意味です。ご存じですよ、ね、そんなこと。ただ、先ほどの例にもありましたけど、亡くなった人が帰って来た時に「仏さんが帰ってきた」と言う。あるいは、亡くなった人の意志を継いで何かをやるうとする時に、「仏の意志に従って」とか、仮にみなさん方の親しくしている人

ひとたび死なば みな「ほとけ」

が亡くなって、そこにお参りに行ったら、「仏さんもきつと喜んでいきましょう」という言い方をする。亡くなった人なのだけど仏さんとして敬っているという、その言葉の後ろにあるのは何だろう。どういう思いなのだろうということを考えていきたいと思います。繰り返し申し上げますけれども、「ひとたび死なば ただ死人」じゃなくて、「ひとたび死なば みな「ほとけ」」として敬ってきた。それは、私の知っている限りでは、亡くなった人を仏さんとして敬うという心情と言いますか、考え方と言いますか、たぶん日本だけだろうと思います。

若い時に二年ほどインドのプーナ大学というところに勉強に行きました。その時に同じように、アジアのあちこちから、例えばお隣の韓国だったり台湾だったり、中国大陸からは来ませんでしたけど、今はミャンマーって言いますビルマだったり、タイだったり、研究者やお坊さんたちが勉強しに来っていました。友達になりましたしてひよっと思つて、「あなたの国では亡くなった人のこと、仏(仏陀)と言いませんか？」って聞いたたら、そんなバカな話あるか！って怒られました。亡くなった人は亡くなった人で、仏さんは悟った人なのだから、亡くなった人を仏陀と言うなんてそんなバカな話あるかって。今、龍谷大学に海外の若い人が勉強に来ていますので、ちょっと聞いたことがあります。そういう

言い方、つまり亡くなった人を仏と言って敬うという言い方はないそうです。ただ、私の知っている人がそのような言い方はしないというだけで、どこかにあるのかもしれないかもしれません。

このような言い方は、おそらく日本人独自の、そして千年以上に渡って仏教を受容してきた、受容の仕方の一つ。私に言わせたらものすごい優しい、思いやりのある、同時にある意味で、亡くなった人だけど仏さんだよ、という敬いの気持ちを添えた言い方だろうと思います。そういう意味で宗教的な深い意味あいがあるのだろうと思っています。

実は、私は仏教学を勉強しましたので、仏（仏陀）は悟った人で、何で死んだ人のことを仏と言うのだろうか、これは間違いじゃないだろうかと若い時は思っていました。しかし日本人が千年以上に渡って仏教を受け止めてきた、そのいろいろな受け止め方を考えた時に、これはやはり我々はもう一度見直していいとか、あるいは日本独自だけれども、ある意味では我々がこれからも伝えていきたい考え方、受け止め方じゃないだろうか、というのが今日みなさんに話したいことなのです。

今回配布した資料に私が参照した本を掲げてますので、みなさん方、関心のある方は自分で読んでみて下さい。その中に『阿含の仏教』が載っています。著者をご存知の方は

ひとたび死なば みな「ほとけ」

「あれ」と思われるかもしれませんが、大谷大学で長いこと仏教学、特に阿毘達磨の研究では、日本どこか世界でも有数の学者であられます桜部建先生です。この『阿舎の仏教』の中に私が若い頃に感じた、仏（仏陀）というのは悟った人なのに何で亡くなった人を「仏」と言うのだろうか？ と同じような疑問を持たれて、同じように、このことが持つ意味を肯定的に考え直したほうがいいのではないかと書いておられます。私が知っている範囲では、インド仏教学を勉強された方できっちりそのところを指摘されているのは桜部先生だけかと思います、といったら言い過ぎかもしれませんがそれでも。

私は医学部に十数年おりまして、患者さんや先生つまりお医者さん、看護師さんなどが抱えている様々な問題、あるいは医療者と患者さんとの関係などについて相談役みたいなこともしてきました。亡くなった方を仏さんとして敬う気持ちがあるのと、ただ死人、死体だというのでは、まるつきり受け止め方、考え方が違うんです。その考え方が違うっていうのはどういうところに出てくるかというと、死んでいく人とそれを看取る家族。死ぬ方からいうと「心置きなく死んでいきますか」というところにつながる。

どっちみち死なんならんですわ、私もみなさん方も、悪いけど。私のほうが遙かに先で

すけどね。人間の死亡率は一〇〇%ですから、必ず死にます。その時に心置きなく死ねますか。つまり、死んでいく先がどうなっているかということ考えた時に、仏さんなのか、ただの死人なのかというのは、特に末期癌の患者さんのように、先が見えている人にとつてもものすごい大きな問題なのです。同じように、その病人を支えている家族の方からしても、安心して看取ることができませんか、と。医学部において本当にこのことを感じました。これはやはり我々の先達が千年以上かけて、死体じゃない、死人じゃない、仏さんだよというふうな受け止めてきた背景というものが持つ意味を考え直す必要があるのでは。私もそうです。みなさん方も遅かれ早かれ、どなたかを看取る側にまわり、やがて自分も看取られて旅立つ、死に逝く人になるわけです。その時に、死んだらどうなるの？と言われて、死んだら死人だよという答えが返ってくるのか、死んだらどうなるの？ 仏さんだよ、というのでは、特に終末期の患者さんにとってはまるっきり受け止め方が違います。そのところ、日本人が千年以上かけてこのように考え続けて来たこと、私たちの先達の方々がこんなふうな受け止めてきたことに思いが及んでいます。一つ二つ例を挙げます。

ひとたび死なば みな「ほとけ」

これは私の知り合いの若いお医者さんが、外科の先生なのですけど、末期癌の患者さんの主治医になったんです。はりきってですね、「何としてもあんたの癌は治してあげるから、安心して任せなさい」って。そして三ヶ月、半年頑張ったのですが、やっぱりダメな時はダメなんです。患者さんも、この先生に任しておいて大丈夫だ、苦しい手術痛い手術も受け、苦い薬も、頭が禿げるような強い薬も飲んで頑張ったけど、「やっぱりダメです」って言われた時の患者さんの言葉。(大声で)「騙したな!」。私は死ぬ人間じゃないから、このぐらいの声で済むけれども、残りの命これだけですよと言われて、このお医者さんに任せたら、大丈夫だ、治って元気になって帰れる、また家族のところへ帰れると思って苦しい闘病生活を我慢してきた。それは治って帰れるから、死なないからだと思っただけです。でもダメな時はダメです。その時にお医者さんに吐いた言葉。「お前、騙したな!」。お医者さんもガツクリです。騙すつもりで騙したんじゃないのですよね、一生懸命治そう、治そうと思っただけで、現代の医療でも追いつかなかった。

次は私の知人で、ここ光華女子大にも来られた長倉先生という方から聞いた話です。彼の知り合いのお医者さんは、「できる限りの治療はします」。でも末期癌ですから先は見えていない。「治療できることは一生懸命、全部やります。だけど、手が及ばないことがあります

ます。こちらでできることは全部やりますが、「最後の一步」は、私は手伝うことができません。自分で歩み出してください。そう言われたその患者さんは、騙したな、じゃなくて、しばらく落ち込んでいたみたいですが、後になって何て言って死んでいったかという、「治らんけど、生きてこの病院出れんけど、先生、あんたに会えてよかった」。

私は十数年医学部に関わってきました。お医者さんも看護師さんもみんな一生懸命なんですよ。患者さんを治して元気にして病院から帰してあげたい。だけど治らない時もある。その時、生きていく力と同じように、死を受け止めるのも患者さん自身が持っている力なのです。生き抜く力と死に逝く力の両方を支えてくれるものは一体何だろう、そのことを、我々の先達はどのように考えてきたのかという問題。このお医者さんは患者さんに次のように話すのだそうです。「最後の一步は、医者は何のお手伝いもできません。自分で踏み出してください。ただ、私も後から行きます」。お医者さんも遅いか早いか死ぬときは死にます。「私も後から参ります」、この言葉わかりますか？ あなた死に逝く人、私生き残る人じゃないのです。遅かれ早かれ寿命が尽きたら私も後から参りますから、先に行って待っていてくださいね。そういう言葉です。『阿弥陀経』の中の「俱會一処」の世界です。

ひとたび死なば みな「ほとけ」

もう一つだけ紹介します。これも末期癌のかなり年配の男性です。長期間入院していたのでしようが、誰も見舞いに来ない。若い看護師さんが担当になって、ある程度親しくなった時に「どなたか家族の方おられないのですか」と聞いたのですが、最初は黙っていました。だんだん親しくなったからでしょうね。少しずつ話し始めたのだそうです。この方、女房子供がいるのですが、その奥さんと子どもさんをほったらかして、若い時に家を飛び出して一生好きなことをやってきたらしいです。だから、今更帰れないし呼べない、そんな立場じゃないっていうんです。そして風の便りに、子どもさんも一人前になり、奥さんが亡くなったことを聞いている。葬式にも行けん。行けるようなことをしてきたわけじゃないですから。墓参りに行きたくても行けない。そして自分は病気になっちゃった。そういう状況の中で、もう後は週単位で考えてください、逢いたい人がいるなら、今のうちに、意識がはっきりしているうちに、口がきけるうちに逢ってください。いや、自分は誰もいないんだ、と。その患者さんが若い看護師さんにこう言ったそうです。「女房に一言詫びたいんだけど、逢えるかなあ」。逢えるかなあって言って、もちろん死んだ後ですよ。女房は天国でも極楽でも、あれだけ苦労して子育てして、ちゃんと家を守ってくれたんだから、しかるべく行くところに行っているだろう。オレは一生こんな生活しかできんかつ

た。死んで同じところに行けるはずがない、一緒のはずがない。でも一言詫びたいっていうんです。もしみなさん方がそばにいてそうやって聞かれた時に、何て答えますか。「心置きなく死ねますか」っていうのはこのことでしょうね。その返事次第で、何も悩みながらどこかホッとして死んで逝けるか、ああ、やっぱりダメかって自分の一生を悔いたままで死んで逝くか……。どっちにしても死ぬんですけどね。大きな違いです。その時に「逢えるかな」っていう世界。それを私たちの、日本人の先達はどうかやって考えてきたのだろうか。そういう問題を一緒に考えてみたいのです。

少し遠回りをしますけど、我々の生と死に対する考え方、いろいろな考え方がありますけど、大雑把な話です。一つはお隣の中国から大きな影響を受けました。古くに奈良時代やもっと前からです。ご存じの遣隋使とか遣唐使とか、最先端の知識を学びに行つたんです。その方々が帰ってきて、国の税金を取るシステムだとかそういうものと一緒に、人間が生まれて死んでいくというこの考え方も伝えてくれました。その考え方が我々に影響を与えたのです。それからご存じの平安以降、本願寺の教えもそうですけど、いわゆる浄土思想が入ってきた時に、たぶん我々の祖先が持つていたのであろう考え方とは違う考え方

ひとたび死なば みな「ほとけ」

を教えてくださいました。それから特に明治以降、また生と死について違う考え方を我々に教えてくれました。例えば典型的な例です。今、どなたかが亡くなって、新聞やテレビでインタビューを受けた時に、大人も子どもも、ほとんどこういう言い方をしますね。「どうぞ天国で安らかに」。あの言い方はここ二、三十年です。一番古いところでは、いわゆる黄泉の国。古事記に出てきます。これは地下の暗い穢れた世界。こういうイメージです。我々は死んだ後の世界が暗くて穢れた世界だということを、新しい思想が入ってきてから払拭できているかという、そうはいかんです。地域によるし、葬儀屋さんによるでしょうけど、例えば、火葬場に行つて帰つてくると、小さな親切大きなお世話ですが、「どうぞ」ってお清めの塩を配ります。あれは手を洗えというのじゃないのです。精神的な汚れを払ってくれと。死と汚れがどこで結びついているかという、極楽浄土でも天国でもなくて、黄泉の国。おそらく一番古い思想なのでしょう。それを我々はまだそのまま残している。それを残しながら、今度は浄土思想が入ってきた。極楽です、ピュアな世界です。これを受け継ぎながら、たぶんみなさん方は、お年寄りが風呂に入って「ああ、極楽、極楽」っていうくらいしか知らないかもしれませんが。でも天国っていうのはご存じのとおり一神教の世界、キリスト教でいう天国地獄の天国ですから、クリスチャンの方

が聞いたら、一生の間一回も神様にお祈りをしたこともなく、教会に一度も行ったこともないのにそう簡単に天国に行けてたまるかっていうだろうと思うんですが、我々は関係なしにこういう多様で重層的な死後の世界のイメージを持っています。気をつけてください。ここにまだ死んだら仏というのは出てこないのです。

ちょっと脇道に逸れます。日本人だけじゃなくて、生と死とを関連づけて考えるということは、実は、どういうふうに生きていくかという倫理観ともすごく結びついている。意識するかどうかは別にして。基本的に言いますと、死んだら終わりという考え方があります。みなさん方の中にもそうかもしれないと思っっている方がいるかもしれません。それから、死んだら終わりじゃなくて、どういう世界か別にして、死んでも終わらない。次の世界を持っている。大きく分けてこの二種類です。人間が四千年かけて創り上げてきた世界です。ただ、私の知っている限りでは、死んだら終わりというのは、どこの世界でも主流派になれません。メインの大きな考え方にならないのです。どうしてかというところ、死んだら終わりっていったら、その時点で、生きてきたことの意味が全部ふっ飛んじゃう。これには人間耐えられないから、終わりだろうという気持ちをごどこかで持ちながら、それで

ひとたび死なば みな「ほとけ」

は堪らんわなあと。多くの場合、それをどういうふうに考えるか別にして。

死んでも終わらないという時にさらに別の選択があります。死んだらみな同じ、死後の世界はみな同じ、という発想と、死んでも行くところが別だよ、死後の世界は人により別だよ、閻魔さまが向こうへ行け、あっちへ行けとか、キリスト教という終末の時、世界最後の時に、永遠の安楽か永遠の地獄か、最後の審判が待っているよ、と。これもその発想です。あるいは六道輪廻。インド流でいうと、生きている時の振る舞い、行為によって次の世界が決まる。これは同じでない方です。不思議なことに、私自身もそうですけど、矛盾しているのですが、両方自分の中に持っています。みなさん方、考えてみて下さい。いろいろあっても死んだらみんな同じという方が、どっかで安心とかホッとします。だけど、例えば、理由なくして我が娘、我が子を殺された親にしてみたら、例えば殺人を犯した人が死刑になったとしても、罪なくして殺された我が娘と、それを殺した死刑囚が死んだ後同じ世界、そんなバカなことあってたまるかと。これも一つの考え方なのです。だけど、いろいろあっても、死んだ後までそんなこと言わんでいいよ、死んだらみんな行く世界は一緒だよというのも一つです。今の例えにあるように我々は両方持っている。「ひとたび死なば みな「ほとけ」というのは、こちらの世界、死んだ後みんな同じ世界だよ

と言うのに繋がっています。お前は地獄へ行け、私は仏さんになるんだっていうのはあちら、死後別々の世界という考え方。死んでも同じではないという世界。繰り返しますが、私もそうですが、たぶんみなさん方も突き詰められた時に、何かの時は、みんな同じ、その方が安心だよっていう気持ちと、先ほどのように、理由なくして、あるいは子どもが集団登校している時にですね、居眠り運転か何してたか知らんけど、車が突っ込んで子どもが殺された。仮にその運転手が何とか罪で仮に死刑になったとしても、殺されたうちの子どもと、殺したあんなに憎いヤツが死んだ後同じ世界、そんなバカな話あるか！っていうのは、親の気持ちとして、それはそれでよく分かります。我々は矛盾しているけど両方持っているということも頭の中に置いておいてください。

まとめますと、生きている時にどういうことをしたか。人殺しをしたか、何をしたかを含めて、生きている時にどういう生き方をして来たかというのと、死んだ後の世界がどう繋がるか。連動している、つまり生きている時の振る舞いによって後の行く世界が違ってしまうと考えと、生きている時は生きている時、死んだらみんな仏だよ、これは連動しない考え。繰り返しますが、両方とも人間は持っています。みなさん方も一人一人の中にも突き詰めていくとたぶんあるでしょう。状況に応じて。それをまず頭の中に入れておいてくだ

ひとたび死なば みな「ほとけ」

さい。

それからもう一つ。「ひとたび死なば みな「ほとけ」」。この考え方をだんだん説明していきます。どんな酷いヤツでも亡くなったらみんな仏さんだから恨んだり憎んだりしてはならない。手を合わせて念仏して敬いなさいという考え方なのです。ところが私どもに仏教を伝えてくれた中国では、例えば、仇を墓から掘り起こして、中国は今火葬になっていますけど、本来土葬ですから、お墓に行つて、死体を掘り起こして、このやろう！つて三百回ムチ打つ。有名な話です。これは死んでも恨み骨髄の例。これと逆なのが、どんなことがあつてもほとけさんです、敬いなさい。日本人は「敬いなさい」という方の世界を取つてくれたようです、私どもの先達は。

さて、死んだらみな仏ということを我々の先達がどうやって受け止めてきたかということとを順番に考えていきます。少し難しい話ですけど、ちょっと我慢して聞いてください。

基本的に、我々日本人や、東アジアの人たちは、生きているこの世界があつて、死後のあの世界がある、そしてどういふあり方であれ、原則間違ひなくあの世界へ行けるといふのが一つのパターン。行けたらいいなつていふのが基本的な考えです。え、行けないのが

いるの？ それはいるでしょう。幽霊とか何とかって言うのは、みんなあの世に行くことのできない例です。中国の行けない例って分かります？ 時々映画に出てくる、キョンシーっていうのがありますね。あれもこの世界からあの世に行けない例です。間違ってウロウロしているからいろんな祟りを起こす。幽霊もそうです。日本の場合、あるいは仏教の場合は、ウロウロしている人を向こうへ送り込みます。例えば手厚く葬って、あるいは、お経を唱えて向こうの世界へ送り込むでしょう。キョンシーにはどう対応するか知ってますか。中国の幽霊、私も詳しくは知りませんが、面白いです。向こうの世界へちゃんと迷わずに行ってくれ、ということをしなないのです。そのへんでウロウロしてもいい、邪魔しなきゃいいっていうのです。どうするかって言うと、邪魔しないようにお札をペタッと貼ったら終わり。お札をペタッと貼って終わってというのは、ウロウロして彷徨っている人は可哀想だからあの世へ送ってあげようという発想が中国にはないのです。要するに、生きてる今のオレに邪魔さえしななければ、お前が彷徨おうが迷おうが関係ないよって考え方です。その話はまたどこかで時間があればしますが。

同じアジアでも、一方に幽霊やキョンシーは例外として、間違はなくこの世界からあの世へ行けますと言う発想があるのに対し、他方に、みなさん方ご存じの、仏教の元になっ

ひとたび死なば みな「ほとけ」

ている南アジアの世界は、基本的に生まれて死んで、死んで生まれての世界です。この生まれて死んで、死んで生まれてを繰り返すのは迷いの世界輪廻の世界と呼ばれています。前者はこの世からあの世へという直線的世界観です。後者は生と死を繰り返す循環的世界観とも言えましょう。

さらに循環的世界観の南アジアでは、この迷いの世界だけではなく、もう一つ、仏さんの悟りの世界があります。迷いの世界と悟りの世界は相互に矛盾し隔絶した、全く異質レベルのあり方です。繰り返しますが、生と死の両者が迷いの世界であり、その生死と隔絶したあり方で、生と死を離れて悟りの世界が考えられている。少しづつ難しく思われるかも知れませんが、ちょっとだけ我慢して聞いて下さい。「生と死」の世界と完全に隔離・隔絶して悟りの世界、真理に目覚めた仏の世界があるというのは、仏の世界は人間の生や死とは本来なんの関係もないのです。最初に話したように、日本以外の仏教国の方々が「死んだらそのまま仏」ということがまったく理解できないのは当然のことなのです。

繰り返しますが、悟りの世界と迷いの世界はまったく矛盾対立隔絶した世界なのです。どこかにパイプが通じていてそこを通ればこちらから悟りの世界に行けるといっているのではないのです。全く矛盾している。それにもかかわらず、異質の両者が一人の人間の中に

ありうる。脇道にそれますが、お念仏ってというのは本来、あちら仏さんの世界なのだけけれど、同時にそのまま私たちが迷いの世界すべてに浸透し、おおっている。すごい世界なのです。

さらに、お念仏のように、絶対矛盾しているものが一人の同一の人間の精神世界の中で一緒になり、私と私を支えている世界の質的転換がありうるということは、様々な方がいろんなふうの説明しています。例えば日本の代表的な西田幾多郎という哲学者はこういう言い方をする。「全く矛盾した世界が私の中で一つになりうる」と。「絶対矛盾の自己同一」という難解なことを言っています。言い方は難しいけれども、迷いの世界でありながら悟りの世界が働いてくれる。どうしてこのような話をするのかというと、ここのあるところを理解してもらわないと、「ひとたび死なば みな「ほとけ」ということが出てこない、理解してもらえないからです。

中国の場合は、分かり易く言いますと「他界思想」。生きている世界と死後の世界がある意味では延長上にあります。全く別の異質な世界とはどうも考えてないらしい。だから、秦の始皇帝のお墓を掘ったら、死後の世界も向こうでオレは皇帝だ、っていうので自

ひとたび死なば みな「ほとけ」

分の周りの兵馬備っていう、すごい粘度を焼いて作った兵隊さんや武器をたくさん置いてあるのです。それは生きている世界の延長上にもう一つ別な世界があり、そこに出かけるという発想です。この考え方が生まれたのは黄土地帯、それを支えてきたのは黄河ですよね。この世界に黄河が流れているように、黄土の下で泉がこんこんと湧いているだろうというので、「黄泉」この字が生まれたのです。これは死後の世界の考え方です。一つは地下、それから生きている方が黄土地帯で黄河によって支えられているように、地下の黄土地帯で地下の泉の世界だっという発想です。

もう一つ、中国の古い書物を読みますと、人間の魂ってというのは「魂」「魄」。言葉はご存じ：特に年配の方はお分かりですよ。魂に二種類あるっていうのです。どうして二種類かと言うと、一方は天から、つまり父親から。他方は大地、母親から受け継ぐという思想。これが二つ揃って生を得る。逆に死ぬのはこの二つの魂が分離して、「魂」は天に帰り、「魄」は身体と一緒に残る。お墓を住居として「魄+身体」で一緒に生き続ける。それがお墓の基本です、中国の。だから墓の中で、魄の方は身体と共に生き続ける、生き続けるためには、例えば秦の始皇帝陵を掘ったら分かるように、兵馬備が一緒に埋葬されている。生きていた時にたくさんさんの軍隊を支えられていたように、死んでからも軍隊や武器

が必要だと。現代でも基本的に同じようですね、生きている世界の延長に死後の世界を考えるのは。

私は滋賀医大に移る前は長崎大学におりました。長崎には、関西でいうと神戸と一緒に中国人街がありまして、中国のお寺がある。そこへお参りに行くと「中国人やなあ」って思いましたね。お線香だけじゃなくて、ちゃんとお金、お札を燃やして死後の世界に届けるのです。もちろん本物のお金じゃないですよ。お供え用のお金です。この世でお金がないと困ると同じように、死んだ後のあの世だって困るだろうっていうので、御供養用のお札を燃やしてご先祖様に届けるのです。ある年に行ったら見かけないものが入っている。何だろうかと思ったら、携帯電話の模型（燃やすからでしょう、木製でした）があるのです。この世界で携帯電話がないと不自由なように、あの世界でも困るだろうというので、お金と一緒に供養のための携帯電話を燃やすのです。そして煙であの世界へ届けようという発想です。

もう一つ、これは余談です。ものすごく乱暴な話ですみませんが、東アジアの世界では死ぬということは、魂と魄に別れて魂の方が天に帰り魄の方は地下に、と説明しました。亡くなった方とどうしても逢いたい時はどうするかというと、天に還ったこの魂を呼び返

ひとたび死なば みな「ほとけ」

して、一時的に再結合すればこの世で逢えるという発想なのです。魂の方をこの世に招いて一時的に再生するという考えです。招魂再生って呼ばれています。招魂祭という儀礼が地域によってまだ残っているところがあります。みなさん方、招魂祭って言葉聞いたことありませんか？ 知らない？ 年配の方がいでしょうか。招魂祭という言葉は日本語から消えたのでしょうか。私の田舎にはこの儀式がありました、子どもの頃に。あの世から魂を呼び寄せ、亡くなった人が一時的に甦ってこの世界に帰ってくるという発想、お盆にご先祖様をお迎えするのは別の考え方ですが、これは中国古来の考え方を受け継いだのでしょうか、よく分かりませんが…。

さて、本来のテーマに戻ります。「ひとたび死なば みな「ほとけ」」を理解するポイントの一つは、インドでは、生まれて死んでを繰り返す輪廻・迷いの世界と、それを乗り越えた悟りの世界とを考えていること。この悟りの世界、それが「みなほとけ」の仏の世界です。悟りの世界への転換がなければ、「ひとたび死なば ただ死人」です。けれども「ただ死人」のままに放置するのではなく、亡くなった方が死を契機に「みなほとけ」と質的転換をする。注意しなければならないのは、死んだらそのまま、自然と「ほと

け」に転換するのでもなく、あるいは亡くなった方が「自分で」、「自力で」転換するのでもないことです。ともかくこの質的転換がおこらなければ「みなほとけ」はあり得ないのです。

この質的転換を可能にしたのは、後で説明しますが、浄土教の教え、皆さん方の「お念仏」の教えです。理論的にはそうなのですけど、そんな難しいことは言わずに、あるいは「ただ死人」から「みなほとけ」への重要なプロセスをジャンプして、あるいはその過程に目を瞑って「ひとたび死なば みな「ほとけ」を我々は受け止めてきたようです。その話をいたします。

生と死について、我々はインド的なもの、中国的なものを次から次へと重層的に受け止めてきたようです。基本的に我々が持っているのは「この世」と「あの世」という直線的な他界思想といえましょう。他界とは、この世界ともう一つ死後の世界。そしてこの世とあの世について出てくる言葉は、「顕界」と「冥界」。我々が生きている世界は明るい世界で、死後の世界は暗闇の世界という発想です。これは、古代の日本文学その他をお読みになった方はすぐお分かりかと思えます。今も我々は葬儀の席などで「幽明世界を異にす

ひとたび死なば みな「ほとけ」

る」という言葉に出会います。幽っていうのは暗い方です。漢和辞典開いてもらったら分かりますけど、幽っていうのは「糸へん」の先が二つありますね。糸の先が見えるか見えないかの、ほのかな暗さという意味です。ほの暗い世界と明るい世界で、生者の世界と死者の世界が別れます。この暗闇の、死後のあの世のことを、我々は、例えば「黄泉（よみ）」。これは中国からそのまま「黄泉」の字を持ってきたのでしょうか。「泉下」っていうのも先ほど言いました、中国の黄河が地下では泉になっている、その世界ですね。冥界の国土なので「冥土」。冥福を祈るっていう言葉は、当然、冥界での幸福を祈る。これは全部中国経由で入ってきた言葉です。もちろん「よみ」など日本本来の言葉もありますけど。

いろんな文献を読みますと、基本的に日本の場合、死後についての一番古いのは縄文時代だろうっていわれています。これは私の考えじゃなくて梅原猛先生の考えですが、基本的に誰もがあの世へ行きますよっていう考えを日本人はどうも持っていたようですね。「死って何？」っていったら、魂と身体が分離して魂が向こうへ行く。これが非常にシンプルな考え方です。古事記の世界になりますと、生きている国から死者の国へというイザ

ナキ、イザナミの話。すいません、イザナキ、イザナミの話知らない人？ そう、ではちよつとだけ話します。古事記の国造りの時に出てくる話ですが、男性の方が伊耶那岐命、女性の方が伊耶那美命です。子どもをたくさん産んで、たぶん産後の肥だちが悪くて若いお母さん死んじゃったのです。その時に、彼の方がどうしても女房に会いたくて、死者の国へ訪ねて行くのです。こういう話。仮に、怒らないでね、あなたが先に死んじやった時に、彼氏に追いかけてきて欲しい？ あの世まで。いらなの？ あなたはどっち？ 恐くて？ 彼が行きたいって言っているのに？ でも、いらなの？ (笑)。みなさん方どうですか？ 追いかけてきて欲しくない？ 欲しい？ 伊耶那岐命はちゃんと逢いに行くのです、古事記に出てますでしょう。愛しい彼女に会えて、そういう目で見ますから、最初は生きている時と変わらない、美しいままの彼女に見える。それで彼女に言うんですね。そんなに早く死後の世界に行かないで、また自分と一緒に生きてる世界に戻ろうよ、って。そう言ったら、伊耶那美命の方は、もう死後の世界の食事取っちゃったからすぐに帰れない。ちよつと死後の世界の支配人に聞いてくるわって。その時の有名な言葉がありますよね。「この奥の部屋見ないでね」って。そう言っただけで死後の世界の支配人を探しに行くんです。みなさん方もそうですね、私もそうですね。「見ないでね」って言われたら見た

ひとたび死なば みな「ほとけ」

くなる。分かる？ 彼がこの箱開けないでねって、この手帳見ないでねって置いていったら見たくなるでしょう？ ならない？ それで伊耶那岐命は見ちゃうんです。そしたら、死後の世界の「膿沸き蛆流る」、死者のイメージです。身体が腐ってきて、目や鼻や耳から蛆が沸いてきて、膿がどんどん流れてくるとかね。ガスが充満してお腹がパンパンになって…。これを見て、逢いたくて逢いたくて来た伊耶那岐命だけれども、ギャーッて叫んだかどうか知りませんが、逃げ出すのです。それで途中で彼女の方も気が付いて「見たな〜」って言って追いかけてくる。黄泉の国から帰るといっているので、黄泉帰り(甦り)って言う言葉が生まれたと言われています。言いたいのは何かというところ、古事記の時には、死後の世界に、それは穢れた世界ですが、行くこともできるし、戻ってくることもできる、このパターンが古事記の中に書かれています。

次は柳田国男の説です。本来の日本の考え方の上に、中国的なものや仏教的なものが入ってきたと考える。かれの説明は今の我々にとって非常に分かりやすいものです。魂と身体が分離して、魂が死後の世界に行くという発想は一緒のようです。ただこの時に、亡くなった人の霊というのは、個別、つまり、うちのおばあちゃんの霊であったり、うちの子どもの霊であったり、というように個別的である。同時に先ほどの古事記を引きずって

ますから、穢れている。その穢れが子孫による先祖供養をとおして、清らかで穏やかな神様へと昇華していく。清らかで穢れを取り除いたご先祖様になっていく。穢れ悲しみから超越するというのが柳田国男の理論です。仏教でも三十三年の御法事とか五十年の御法事をしますが、これは仏教に直接関係ある数字ではありません。元々は中国から入ってきました。そして先祖供養を通じてだんだん清らかになって租霊になり一族の氏神になって。これが柳田国男の解釈したこの世とあの世です。ここでもう一つ気をつけてください。何が言いたいかというと、この世からあの世へみんな行けるんだよということ、どこかにまだ穢れとか悲しみを持った個別的な魂を受け継いでいることです。

さらに平安時代に仏教の浄土思想が入ってくると、亡くなったら死人のままではなく「浄土」へ迎えられるという考え方になる。ここで重要なのは「浄土」へは自分の努力で往くのではないことです。誰であつてもみな阿弥陀さんに連れて往ってもらおう。誰もがあの世へ行けるという考え方を受け継いで、誰もが浄土に往く(実際は連れて往かれる)という考え方になる。そうすると、一方であるの世は古事記の「穢土」から「浄土」へ、清らかで輝く世界へと変質を遂げます。現代風の「天国で安からにお眠り下さい」の天国も、キリスト教的な天国とは別の概念ですが、決して「穢土」のニュアンスは含んでいませ

ひとたび死なば みな「ほとけ」

ん。同時に、だれもがこの清らかな世界（少なくとも穢れた世界ではない）へ行けるとい
う理解を引き継ぐことになる。さらに、「黄泉」とか、「極楽」、「天国」とか、呼び名は異
なりませんが、この世界とあの世界を行ったり来たりという考えを他方で受け継いでいる。
その典型的な例が、お盆の時にご先祖様をお迎えしてまた向こうの世界に送り返す、その
ところに引き継がれている。

余談ですが、この生の世界から死を挟んで死後の世界へ送り出すのは、日本では仏教・
お坊さんの仕事です。ところが死後の世界からこの世界へ呼び戻す、中国で言いますと招
魂儀礼、一時的にこの世界に戻ってくるというのが日本にもあるのです。それが例の下北
は恐山のイタコとか、私は長崎におりましたけど、長崎の対馬にもそのような伝承がある
と聞いたことがあります、どういう系統なのか私には分かりませんが。いずれにせよあの
世界からこの世へ呼び戻すのは仏教の仕事じゃありません。それは、お坊さんの仕事では
なく、ある種のシャーマンの仕事と、役割分担があるようです。

またわき道にそれました。本題に戻ります。今申し上げたのは、「ひとたび死なば み
な「ほとけ」」の考え方を支えているもう一つ大事なことは、「死んだら、誰もがあの世に

行ける」という構造であることです。これは古事記の時代から継承されてきたようです。ただし先ほども触れたように、だれでも行くことができるとしても、「ただ死人」で行くのでは意味がありません。「ただ死人」から「みなほとけ」への大きな変質、転換がなければならぬのです。この「ただ死人」から「みなほとけ」への大きな転換は先ほど述べたように、浄土思想が日本の風土に定着したことが背景にあると言えましょう。

理解するのが少し難しいですか。先ほどから申し上げてきましたように、「ひとたび死なば みな「ほとけ」は、これは仏教学的に説明できることではありません。そうではなくて日本独自の感性であろうと思います。それも私どもの先達が千年以上もかけて伝えてくれたものです。それがどういう意味を持つのかということを駆け足で説明します。

繰り返しますが、仏陀というのは目覚めた人という意味です。これは辞書を引いたら分かりますが、梵語の動詞語根「budh」というのは目覚めるという意味で、その過去分詞形「buddha」が「目覚めた人、悟った人」という普通名詞です（釈迦牟尼仏の仏陀は固有名詞）。その「buddha」を中国で音写、音で訳しました。いくつかの音訳があります、「浮屠（フト）」あるいは「仏陀（ブダ）」がよく知られています。その「仏陀」の「陀」の字が落ちて「仏」になります。この種の省略はよくあります。たとえば五重塔の「塔」。

ひとたび死なば みな「ほとけ」

元々の梵語は「stūpa」（仏舍利塔）、音写して卒塔婆。冒頭のS音が発音しにくかったの
 でしょうか、「卒」が脱落して「塔婆」。この言葉は現在も使われています。お盆にお墓に
 塔婆を立てる、とか。それから次に「塔婆」の「婆」の字が落ちてだけ「塔」だけが残
 る。これは三重塔とか五重塔とか、普通に使われています。

今、必要なのは「浮屠」です。「浮屠」が平安時代に「ほと」に変わったと言われてい
 ます。私の専門じゃありませんので、これは他人様の説です。次に何で「ほと」が「ほと
 け」（ほと+け）になったのか、いくつかの説がありまして、私も分かりません。「ほと」
 にその道の人を意味する「家（け）」が付いた、あるいは、もののけとか靈妙なものとい
 う「け」が付いて「ほとけ」が生まれただろうというのが一番代表的な説明だそうです。
 以上はどのようにして「ほとけ」という日本語が生まれたかという説明でして、この「ほ
 とけ」ということばを、「仏」という字の訓読みに当てたのです。

「ほとけ（仏）」という言葉が本来の、悟りを得た人という用例で日本の文献の中で何時
 から出てくるか、ご存知の方もおられるかと思いますが八世紀です。「仏」という言葉で
 悟った人を表すようになったのはいつ頃かという話題で必ず出てくるのが奈良は薬師寺の
 「仏足石歌碑」。これはご存じだと思います。お釈迦様を礼拝する時にかつては仏像を造ら

なかった、あるいは造ることを憚った。その代わり、お釈迦様が座っていた台座であるとか、その下で悟りを開いた菩提樹であるとか、同じように、お釈迦様の足裏の形を写して、これが仏足石、それで仏さまを表して礼拝していたのです。

薬師寺の仏足石に刻まれているということは、礼拝の対象ですから、ここの「ほとけ 仏」はこれは悟った人の意味でして、決して「亡くなった人」の「仏」ではありません。薬師寺の仏足石歌碑を見ましよう（以下は廣岡義隆「仏足石記・仏足石歌碑本文影復元」三重大学紀要1990を参照した）。

佛跡 一十七首中

舎加乃美阿止 伊波尔宇都志於伎 宇夜麻比弓

乃知乃保止気尔 由豆利麻都良牟 佐々義麻宇佐牟

しかのみあと いはに うつしおき うやまひて

のちのほとけに ゆずりまつらむ ささけまふさむ

釈迦の御足跡 石に写し置き 敬いて

後の仏（ほとけ）に 譲り奉らむ 捧げ申さむ

これは万葉仮名です。仏足石の歌は十七首あってそのうちの第九番目です。歌にある「後

ひとたび死なば みな「ほとけ」

の仏」は例の弥勒仏のことです。弥勒さんって分かりますよね、弥勒菩薩。お釈迦様がこの世界からいなくなつて、次にこの世に現れる仏さまが弥勒さんなのです。いつこの世界に現れるのかと言えば、お釈迦様が亡くなつてから五十六億七千万年後です。随分長い時間でしょう。現在は兜卒天で修行しているのです。お釈迦様の次の仏さまだから、「あとのほとけ」と書いてあります。この場合の仏は死んだ人亡くなった人ではありません。弥勒菩薩ですから、明らかにこれは悟つた人なのです。

次に、もう一つの「亡くなった人」を「ほとけ」と表す用例、これもいくつかあるのですが代表的なものを示します。はっきり年代が分かっているのが西行の『山家集』に出きます。いつ頃詠まれた歌か知りませんが、後撰集、九五一年には載っていますので、つまり十世紀には、「ほとけ」という言葉で亡くなった人を表すということが用例として出てきます。

仏には桜の花をたてまつれ わが後の世を人とぶらはば

(仏となった私に桜の花を供えてください。私の来世を弔ってくれるならば。)

この仏は死んだ私にという意味です。私が悟つたから、悟つた私にという意味ではありません。明らかに死んだ人。

このように、八世紀に「ほとけ」という日本語で悟った人を表す用例が出てきました。その後、十世紀には亡くなった人のことを同じように「ほとけ」と表しています。それから数えたら千年、もしくは千数百年、我々は「ほとけ」という言葉に二重の意味、悟りを得た人という意味と、亡くなった人という意味を持たせて、奥行きのある言葉として用いて来ています。その場合注意すべきは、亡くなった人をそのまま別名「仏」というのじゃなくて、そこにもう一つ隠れた質的転換がある。亡くなった人をただの死人ではなく、仏さまとして敬うという変質を含んだプロセスが起こっている。「ひとたび死なばみな「ほとけ」という考え方を我々はどこで得たのだろうか。それは生きている者と死んだ者との強いつながりと、さらには死んだ者を死者のまままで放置するのではなく、仏さまへと転換し仏さまとして敬う、つまり生者から死者へ、さらに死者から仏さまへという転換の構造の中から生まれて来たといえましょう。それを可能にしたのは先ほどから述べているように、浄土思想が日本の風土に定着したからです。

繰り返しますが、よく我々が聞きます「さだめし、ほとけもそれを聞いて喜んでいましたよ」とか「ほとけの意志に従って:」、これは亡くなった人を「ほとけ」と呼ぶのですが、「Buddha 仏陀」の本来の意味にはない用例なのです。そして私の知ってる限りでは

ひとたび死なば みな「ほとけ」

他の仏教国のどこにもない。このような日本独自のあり方で、「ほとけ」という言葉を二重の意味で受け止めてきた、これが言いたいことの一点です。

そこにあるのは、この世と仏さまの世界との関係です。この世では、賢いとか、アホとか、正直とか、嫌なヤツとか、愛された者、憎まれた者、忌み嫌われた者、みんな関係なしに死んだら仏さまだよ、この感覚なのです。どんなに酷いヤツでも亡くなったらみな仏さまだ、仏さまを憎んだり恨んだりしてはいけない、みんな拝みなさいという世界です。それを支えているのは、迷いの世界がそのまま質的に転換した時に悟りの世界になるという考え方、あるいは、お念仏のように、悟りの世界が我々のそのまま迷いの世界にも及んでいるという受け止め方でありましょう。

この世からあの世へ旅立つ時には、まだ恨みつらみ、善悪、喜びや悲しみ、みんな含んだままです。あるいは一人一人がそれぞれの思いを持ったまま亡くなった方なのです。それをどのようにしてもう一つ質的に転換していくかという話です。生きている人が死者になり、さらにもう一度仏さまの世界に転換する、この構造を含みながら我々は「ひとたび死なば みな「ほとけ」という理解を継承してきたのです。「ほとけ」の言葉の中に二つの意味を持たせ、「ほとけ」と言った時に一方で亡くなった人を、同時に亡くなった人か

ら悟った人へと質的に転換させるといふ構造を背後に含んで使い続けてきたのです。

一つ注意しておきますけれども、この世界での善悪、喜びや悲しみ、あるいは犯した罪を、我々は無かったことにすることはできません。さらにこの娑婆世界でやらかしたこと、善いことも悪いことも含め、その結果は、すべてこの社会のルール、世間の道徳律や法律に従って、やらかした本人が受け取るしかありません。生きている限り、社会のルールや法律はついて回ります。先ほど我が子を殺された親が…という話をしました。殺人という罪を犯したのであれば、その罪に対応した罰、制裁を犯した本人が社会から受け取らなければなりません。娑婆のことは娑婆のルールに従うのが当然です。間違っても、「ひとたび死なばみなほとけ」だから、殺そうが何しようが関係ない、というのではありません。今日の話の始めの方で、死生観と倫理観の話をしました。憶えていますか。この世での行為と死後の世界がリンクするかしらないかという話です。理由無くして殺された我が子と殺した犯人が一緒の世界に行ってたまるかというのはリンクした世界観です。悪事を働いたから地獄へという考え方です。この考え方があることを承知の上で、私たちの先達は「みなほとけ」を受け継いできたのです。それは死後の世界までこの世の恨みつらみを持

ひとたび死なば みな「ほとけ」

ち込まない、娑婆世界のルールを適用させない、死後のことは仏さまにおまかせするとい
う立場です。この世の恨みつらみを、仏さまの世界を媒介にもう一つ乗り越えられた時
に、「でも、仏さまの世界だからなあ」の世界が開けてくる、そのことを私たちの先達が
ずっと考えてきたのでしよう。このように「ひとたび死なば ただ死人」じゃなくて、そ
の死人が仏さんにならしてもらおうのだよと、受け止めてきました。その受け止めてきたこ
とを、我々のこの世界の中にもう一度振り向けて、「だから、恨みなさんなよ」と。「いろ
んなことがあった、喜びも悲しみも恨みもあったけれども、今は仏さんにならしてもらっ
たのだから恨みなさんなよ」と。

まとめます。「ひとたび死なば みな「ほとけ」という言い方は、「仏陀」の言葉が持
っている本来の意味とはちよつと違います。極端に言ったら間違っているかもしれないませ
ん。「ほとけ」はあくまでも悟った人ですから。でも、悟っていなくても亡くなったら仏
さんですよというふうに私たちの先輩方は受け止め受け継いできました。そこにあるの
は、「仏さま」に二重の意味を持たせ、亡くなったら死人じゃなくて仏さんだよという質
的転換を暗黙の了解として受け止めてきた背景があります。じゃあ、どうして「死人」が

仏さまの世界へ行けるの？ それは救済の理論です。阿弥陀さまが救ってくださるから。この理論が根本にないと、生から死へ、さらに死者から仏への転換ができません。生から死への移行だけならできますけど。

もう一つ、最初に話したことです。医学部にいて感じたことですが、「騙したな！」って言うて死んでいかれるのは辛いのです。お医者さんも辛いのです。それを乗り越えるのに必要なのは、何としても生き抜くという力と、でもどこかで、人間の死亡率一〇〇%、寿命が尽きたら死んで逝く、それを我が死として受け止める力とのバランスなのです。お医者さんにしてみれば、治せなかったのは非常に残念です。でも「騙したな」って言われて患者さんに死んで逝かれるのと、「治らんかったけど、あんたみたいな先生に逢えて良かった」と言うて死んで逝かれるのと、まったく異なる話です。お医者さんの卵、看護師さんの卵に、どちらのお医者さん、看護師さんになりたいかと話しかけてきました。治らない、死ぬ時は死ぬ。だけど、私は生きてはこの病院から出られないけれど、最後にあなたに会えて良かった。最後の最後まで生き抜く力を持ち、矛盾する話ですが同時に死に逝く力によりわが死を自分で受け止める。その背後に何かがあるか。死に逝く自分を受け止められるということは、死後の世界をどう受け止めていくかに繋がります。真つ暗闇で穢

ひとたび死なば みな「ほとけ」

れて云々という世界じゃなくて、少し前に話しましたが女房に一言詫びたいと言っていたあの方も、先に亡くなったその方の奥さんも、みんな仏さまですよという、その世界があつてはじめて、生き抜く力と死に逝く力のバランスが取れるだろう、あるいは取ることが可能になるだろうということ、それが私が十二年ほど医学部において考えたことです。

あちこち話が飛び、省略したところもあるので、少し話が難しかったかもしれないが、言いたかったことはただ一つです。生き抜く力と死に逝く力、それを支えているもの、ここ光華女子大学で言うところ阿弥陀さまの世界、死んだらほとけという世界があつて、我々は生き抜くことも死に逝くこともそのまま受け止めることができるのでしょうか。それが私の今の考えです。そして「ひとたび死なば みな「ほとけ」という考え方が、千数百年の私たち日本人の考えの中でどのように成長し、受け止められるようになったのか、ザツと振り返らせてもらいました。

以上で終わります、有難うございました。

——二〇一二年五月二五日——